マレー半島及びシンガポールにおける神社史
―黒住教信者の永田弥八郎を中心に―

大澤広嗣

はじめに

筆者は、真如親王（高丘親王）とシンガポールの昭南神社について、以前に論じたことがある。[1] 真言宗宗祖の弘法大師空海に参じた十大弟子の一人である真如親王は、インドへ向かう途中に「羅越国」で没したという。第二次世界大戦中は、南進熱の高まりを受けて、シンガポールが親王の物故地とされ、同地の攻略後は日本陸軍が建立した昭南神社に、親王の尊霊を合祀する動きが起きた。しかし、皇族出身だが仏僧ゆえ、祭神に列せられず、画家の園部香峰（戦後は橘天敬）による「高丘親王御図」が、神社へ奉納されるに留まった。

昭南神社の前身が、新嘉坡大神宮（後に照南神社）であるのは知られてきた。[2] 今回、筆者の調査により、その起源は馬来半島大神宮であり、教派神道の一信者の建立によることが明らかとなった。従来まで経緯が不詳であったマレー半島及びシンガポールでの神社史を更新すべく本論を記す。また、近年の海外神社研究の大きな進展に刺激を受けたことも理由にある。[3]

シンガポールの照南神社について、主な先行研究に政治学者の矢野暢（とおる）（一九三六～一九九九）による『「南進」の系譜』（一九七五年）がある。[4] 矢野は、同神社で宮司を務めた千々和重彦からの聴取でまとめた。当事者の証言に基づく記録として、貴重である。だが、同書が紹介する千々和のエピソード（多くが手柄話）について、事実として認

定するには慎重を要する。本論で述べるとおり、一部の内容に誤記があるため、残念ながら全面の信頼が置けないからだ。矢野は、「戦前、照南神社の神主をしてられた千々和重彦氏が博多に健在なことを知り、飛んで行って実に有益な面接の機会に恵まれた」[5]と述べるが、その証言の裏付けを取らずに執筆したのである。

同書の刊行以降、照南神社や日本占領後の地名「昭南」の由来について、誤った説が流布された。本論では、まず矢野の『「南進」の系譜』の誤記を指摘した上で、照南神社の起源と展開を論じたい。議論の前提のため、各神社の概要を整理する。

〈英領マラヤ、スランゴール州（現・マレーシアの領内）〉

① 馬来半島大神宮（マライ）――一九一二（明治四五）年頃建設計画。一九一七（大正六）年頃に一部建物（本殿・社務所）竣工。黒住教信者の永田弥八郎が建設。自身が経営した永田護謨（ゴム）園内に所在。黒住教の雑誌に活動が紹介。後に永田は、同地での護謨園経営と宗教活動を終えて、シンガポールへ移住。

〈英領マラヤ、シンガポール（現・シンガポール共和国）〉

② 新嘉坡（シンガポール）大神宮――一九二二（大正一一）年創建。初代宮司永田弥八郎。没後、一九三四（昭和九）年に二代宮司千々和重彦（奉職当時・永田姓）が就任。市街地北方のトムロン路の大平護謨園（大平源四経営）内に所在。新嘉坡奉斎会に寄進。

③ 照南神社（しょうなん）――一九三九（昭和一四）年又は一九四〇（昭和一五）年改称。宮司は千々和重彦が継続。ゴム園が権利譲渡となり社殿が所在した場所が、永福護謨園（永福虎経営）となる。改称後に、組織強化のため新嘉坡日本人会が管理担当となり、照南神社氏子会が結成。神社が市外遠方に位置するため、市内セレギー路の日本人倶楽部横に飛地境内地の照南神社稜宮（又は照南神社槇宮）を設ける。

④ 昭南神社（しょうなん）――一九四二（昭和一七）年、日本のシンガポール占領後、同地の「昭南島」への改称に合わせて、

社名を改める。陸軍第二五軍司令官山下奉文が新規社殿の建立を発案。昭南軍政監部下の昭南特別市庁舎での仮奉斎を経て、軍により移転拡張工事。一九四三（昭和一八）年市街地北方のマクリッチ貯水池湖岸に創建。市の所管。宮司中村春雄。一九四五（昭和二〇）年廃社。

一、先行研究の誤記

矢野は、『「南進」の系譜』にて「昭南神社の機能」の一節を設ける。小項目として「千々和重彦という人」、「「日本化」の努力」、「「昭南島」命名の背景」を置く。同書での誤りは主に二つある。

（1）初代宮司はキリスト教ではなく黒住教の信者である

矢野は、「永田神官はシンガポールの初代の神官であったが、神主としての正規のトレーニングを受けたことはなく、どうやらキリスト教会と関わった期間のほうが長かった人物のようである」[6]と書く。

矢野が話を聞いた千々和重彦は、新嘉坡大神宮の二代宮司であるが、「初代」とは永田弥八郎のことである。千々石は奉職当時に「永田重彦」と名乗るが、矢野が述べるとおり両者には血縁関係がない。初代の永田弥八郎は、後述するように、教派神道の一派である黒住教の信者であった。黒住教の各地の拠点は、「教会所」と称する。教会はキリスト教に固有のものではなく、様々な宗教団体では、教会なる名称で支部を置く。

おそらく矢野が、千々和から話を聞いたなかで、先代の永田が「教会」に関わっていたとの証言を得た際に、教派神道の教会であるにも関わらず、キリスト教の教会と早合点したのである。

（2）「しょうなん」の表現創始は千々和重彦ではない

新嘉坡大神宮は、一九三九（昭和一四）年又は一九四〇年に照南神社と改称した。次いで、一九四二年に同地を占

領した日本軍が、シンガポールを「昭南島」と改めた。

矢野は、神社に「千々和のつけた名前は「照南」であって「昭南」ではなかった。しかし、いずれにせよ、「しょうなん」という表現の創始者が千々和であることは疑いもない事実」[7]で、改称は「千々和の独断によるものであった」[8]と述べる。そして矢野は、「照南神社に改称したとき、千々和は「照南神社」という額を自分で彫って拝殿の前に掲げた。日本軍がシンガポールの占領に成功したのは昭和十七年の二月中旬であったが、占領の二日目に新司令部の副官が参拝に訪れ、その「照南神社」という額を目に留めている。シンガポールが「昭南島」と日本軍によって名付けられた背景には、このなにげないエピソードがかなり大きな意味を持った」[9]いう。

矢野は、千々和が「照南神社」に改称したと断定する。しかし、日本から渡航して間もない新参の若手神職が、シンガポールで事業を興して日本人社会の精神的な中心である神社を崇敬する有力者らを相手に、彼の発案で神社の名称を変えることができたのかは、慎重に考えねばならない。

実際のところ、本論で述べるように、一九二八（昭和三）年に、ある海軍将校が奉納した扁額の字句の中に、「照南」の文字が使われていたことが発端である。

二、英領マラヤのスランゴル州における永田弥八郎の活動

（1）南洋渡航とゴム園経営

馬来半島大神宮を建て、新嘉坡大神宮の初代宮司となる、永田弥八郎（一八九〇～一九三四）の経歴を見たい。永田は、自ら志望して神職となったのではない。南洋に雄飛した日本人の大勢と同じように、事業を興すことを夢見て、故国を出立した人物である。

永田は、一八九〇（明治二三）年に、長崎県で生まれた[10]。岡山を本拠とする黒住教は、九州にも教線を広げており、

永田は父祖の代から黒住教の信者であった。一九一四（大正三）年時点で、長崎県内には九か所の教会所が存在していたが、永田が所属していた教会所は未確認である。[11]

永田は、早くに父を亡くし、事業に失敗して財産が尽きたため各地を遍歴するが、成功には至らなかった。アメリカ渡航を決意して、一九一〇（明治四三）年に上海へ渡り同地で機を待った。しかし行き先を変えて、一九一一年に香港経由でシンガポールに着く。

英領マラヤのスランゴル州フルスランゴル郡にあるクアラクブ、現在のクアラクブバルに至った。「偶々此の地にて好事業に逢着し、此所に永住の意を定めぬ。爾来専心一意業に当りしがため、禍難を免れ目的を遂行し、現今にては百町歩余〔約９９・２ｈａ〕の護謨栽培に従事」[12]することになった。シンガポールで邦人向けに出版活動を行った南洋及日本人社による『馬来に於ける邦人活動の現況』（一九一七年）は詳しく伝えて、永田護謨園はクアラクブ北西に隣接したキルリン村にて、一九一三（大正二）年一月に土地租借を受け、一九一四年一〇月に植付を行い、個人組織で運営したという。[13]

注目すべきは、同書でゴム園について「持主　永田伊勢之助」と記しており、他の記録には「永田伊勢松」[14]の名前も見える。永田は、敬神の念から、天照大神を祀る伊勢神宮の内宮（皇大神宮）を意識して自称したのである。まさに、永田が信仰した黒住教の主祭神は天照大神であった。教祖の黒住宗忠（一七八〇～一八五〇）は、朝に昇る太陽に拝礼して天照との合一という神秘体験を得たことにより、黒住教を立教したのである。

（2）事業の成功と発願

明治以降に南洋各地へ渡航した日本人は、事業を展開した。永田は、日本から離れた海外で、事業が成就したことを宗教的に深く感ずるところがあった。そのことは、伊藤友治郎『南洋群島写真画帖』（一九一四年）にある。同書には、永田の写真と共に、その説明文に「氏は敬神の念深くこの地に太神宮を建設せんことを〔スランゴル州〕政庁

に出願し敷地の下附を得今や其創立に努力す」とある（**図1参照**）[15]。写真には洋館が見えることから、永田は、原生林を開墾したのではなく、既存のゴム園の権利を買ったのであろう。

前掲の引用文中にある「敬神」に注目されたい。事業を営む永田は、天照大神への報恩感謝の念があった。そこで永田は、「此の如き成功を以て、一に御神徳によるものとなし、南洋在留の本邦人に残らずはやく天照太神の洪徳を光被せしめむとし、同志と相謀りて、一大教会所の設立に着手」[16]したのである。

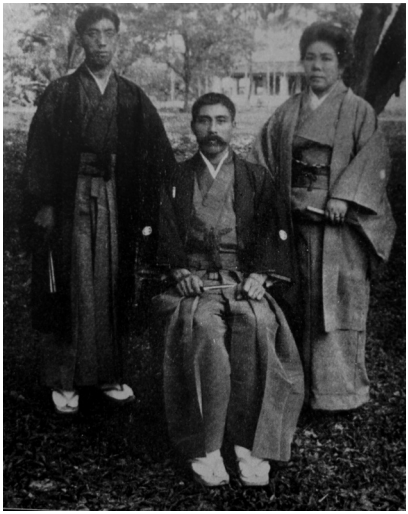

図1　英領マラヤの永田弥八郎（中央）。経営した永田護謨園で撮影

（3）馬来半島大神宮の建設計画

永田弥八郎が構想した「一大教会所」の場所は、クワラクブ西方にあるクアラ・クブ・ロード駅から四町（440m）ほど離れた地区が予定地となった。市街を一望できる高台で、スランゴル州政庁から許可を得て土地の選定に至る。その高台の下には、既に中国系寺院があったという。同駅は現在では廃止され、軌道の近代化工事の際に、南方向に移設され、現在はクアラ・クブ・バル駅と称している。

一九一二（明治四五）年当時の計画段階で、建物の完成予想図が残されている（**図2参照**）[17]。その仕様は、「建築の大体は……方六尺〔1・8m〕の車寄の次に、方十八尺〔5・5m〕の説教所あり、而して十八尺〔5・5m〕の廊によりて、正面十二尺奥行九尺〔3・6×2・7m〕の神前に接し、神殿には、天照太神、八百万神、教祖〔黒住〕宗忠神を奉祀するの予定なり」[18]という。

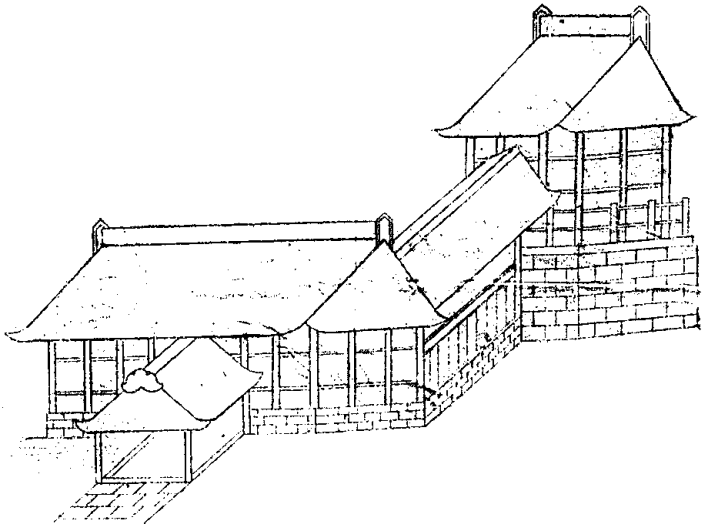

図2　永田弥八郎がマレー半島にて建立した、馬来半島大神宮の当初の完成予想図

この記録の出典は、黒住教の機関誌『経世雑誌』（一九一四年七月発行の第六巻第八号から『日新』に改題し現在に至る）に掲載されたものである。永田は、遥か南洋の地から、信仰する黒住教の本部に手紙を送り、現地の活動状況を詳細に報告した。黒住教でも、永田は単なる海外在住の一信者ではなく、教線拡大を担う布教者として期待していた。

一九一三（大正二）年の『経世雑誌』に掲載された、「教勢一覧図」（一九一二年一一月調査）が明確に示す。雑誌の巻頭に掲載された黒住教の布教範囲を示した折込地図であるが、日本本土以外の場所は地図の縮尺の関係で含まれず、欄外の凡例として「地図ニ示セル外ナホ左記ノ五ケ所ニモ教会所及結集団アリ／一、印度馬来半島クワラクブ市／二、布哇加哇島コロアラロイ／三、布哇馬哇島ハマクアポコ／四、樺太豊原／五、朝鮮南慶尚道統営[19]」と記載する。

黒住教では、海外で活動する拠点の一つとして、マレー半島での永田の存在を認識していたのである。この地図が掲載された時点では、前述の神殿と説教所は竣工しておらず、永田が経営したゴム園内の一角にて、信仰グループを形成して活動していたと推測される。

三、馬来半島大神宮の建設経過

（1）難航した建設工事

永田弥八郎による建立計画について、黒住教の雑誌に初報が掲載されてから、四年後の一九一六（大正五）年に続報が掲載された。公文書には、「馬来半島大神宮」[20]と記録されるが、雑誌記事には特段の名称はない。

個人の独力を以て教会所設立を計画せしが、何しろ外国の事とて日本建築の設計者に乏しく、遂に遥々日本に紹介して漸く設計図面を得し所、印度（ママ）政府の許可に手間どり、ために荏苒一年有余の歳月を経過せり。然るにたま〳〵欧州戦乱勃発して、経済界に非常なる恐慌を来し、其等のために建築工事に又々支障を生ぜしが、昨年の御大典を紀元として、いよ〳〵万難を排して工事に着手し、本年九月の秋季皇霊祭迄には成就せしむる筈の由[21]

計画が遅延したのは、この地域では、日本建築を手掛ける人が少ないからであった。幸いにも適任者が見つかり、工事を進めることができた。また地元のスランゴル政庁からの許可に時間がかかったのは、一九一四年の第一次世界大戦の勃発により、宗主国のイギリスが参戦して影響が出たためでもあった。

図2で示した一九一二（明治四五）年時点の計画案から発展して、その後の一九一六（大正五）年の案では、境内地内の諸施設を充実させようとしたことが窺える。

右設計図面を一覧するに、本殿は十二尺〔3・6m〕に九尺〔2・7m〕にして拝殿は十八尺〔5・5m〕四面、連ぬるに十八尺の廊下を以てし、前に向拝あり。境内には池あり噴水あり記念碑ありて、更に事務所もあり。土地高くして、麓に支那寺及び印度寺を望み、鬱蒼たる護謨樹の間には三十尺〔9・0m〕の大鳥居を立つべく、

いよ〳〵竣成の暁は、異国の天地に神威稜々たる輪奐の美を発揮するなる可し。敷地及近傍の現状風景写真四葉を永田氏より送付せられた……。[22]

文中で触れる図面と写真は、記事では掲載されていない。一九一二年案と一九一六年案を比較すると、神殿は本殿に、説教所は拝殿に、名称が変わっているが規模は同等で、池と事務所、更には大鳥居を建設しようとしたことが分かる。

(2) 竣工した建物部分

一九一七（大正六）年発行の黒住教の雑誌には、当初の計画のうち一部の建物が完成したことが報告されている。

馬来半島クワラクブ居住の、本教篤信家永田弥八郎氏が、御即位式記念として、同地に太神宮の建立を企画せる事に就いては、已に報導（ママ）する所ありしが、右計画は其後着々進捗し、今回二千三百弗（ドル）の義捐金を得て工事に着手し、本殿並に社務所は既に造営を終り、更に拝殿の建築を企て、工事募集の為め目下同島内を遊説中なりと。[23]

記事によれば、大正天皇の即位を記念する「太神宮」は、在留邦人からの寄附金二三〇〇海峡ドルをもとに、祭神を奉る本殿と事務を行う社務所の工事が終わったという。更に参拝者が集う拝殿の工事に向けてさらなる建設費の確保のため、マレー半島で活動する日本人に向けて、永田は勧募を呼び掛け回っていたことが分かる。

伊勢神宮にあった国の行政機関である神宮神部署に対して、特別奉斎に基づく別大麻の授与を永田が求めていたことが公文書に残る。

現在神嘉坡神宮ノ言ニ拠レハ大正四年大正天皇御即位記念事業トシテ「セランゴール」州在留邦人敬神家ノ発議ニ依リ神社奉斎ヲ決定シ大正六年伊勢皇大神宮神部署宛申請セル処伊勢内宮及外宮ノ両神霊分身（神格別大麻）ヲ同年七月四日附ニテ認可セラレ予テ馬来連邦「セランゴール」州「コーラクボダンジョン」ニ準備中ノ社殿ニ同年九月二十三日鎮座祭ヲ執行シ社名ヲ馬来半島大神宮ト称シ〔傍点引用者〕[24]

大正六年六月一日附ヲ以テセランゴール州コーラクブ在住ノ永田弥八郎ヨリ馬来半島全部及新嘉坡、馬拉加、彼南ノ各海峡植民地内ノ邦人団体ヲ代表シ永久奉斎ノ目的ヲ以テ神宮神部署ニ皇大神宮別大麻拝受ノ申請アリ仝七月四日之ヲ授与シタ[25]

この文書の由来は、永田の没後に、新嘉坡大神宮を市内中心部へ移転する計画が起きたときに、神社の世話人側が在留邦人に対して寄附金を呼びかけたが、一部の人々から神体の正当性を疑う動きが出た。そこで在シンガポール日本総領事から、外務大臣を経由して、神社行政を所管した内務大臣に宛てて、過去の神体下附の経緯について照会を依頼した文面である。

この後に永田は、ゴム園の権利を売却して、スランゴル州からシンガポールに移って宗教活動を続けた。マレー半島には日本人が経営する三五公司や藤田組などの大規模なゴム園が存在した。一九二八年に、ある現地在住の邦人は、「ゴム価は……下落し、邦人経営園の手放しされるもの多く、一時内地資金がゴム園に向つて流入した花やかな時代は見る影もなく、寂冥を極めてゐる」[26]と書く。個人経営の小規模なゴム園では、経営が厳しかったからであろう。

四、新嘉坡大神宮の建設と永田弥八郎の着任

（1）社殿の景観と建立経緯

昭和前期の段階で、日本人が植民地や移民地で設置した神社について、網羅的に述べたものは、小笠原省三『海外の神社』（一九三三年）である。「新嘉坡大神宮」の項目を見たい。赤道近くの南洋の地に立つ社殿の様子を追想してみよう。

常夏の国、新嘉坡には約四千人の同胞が在留する。日本から所謂洋行する人は此処へ来ると、異国的情趣を満喫する事が出来るし、欧州から帰朝の途にある同胞は、この港に上陸すると、久しぶりで日本に帰つたやうな気がするであらう。／日本旅館もあり、三味線芸術に陶酔する事も出来る土地である。

市街地を八哩（マイル）〔12・9km〕ばかり距つたゴム園に、天照皇大神を奉斎した神社がある。日本の農家を想はする馬来人や支那人の住家を左右に見て行くと、途はだら〳〵坂になり自動車を下りねばならない。家鴨が鳴き、家豚が途に遊んでゐる。

鳥居が見える。神社が近いなと想像される。もう此の附近はゴム園で、支那人の労働者が、鼻唄をうたひながらゴム液を採取して居る。／やがて小さな第二の鳥居と神明造の社殿が見える。本殿と拝殿がある。右側に社務所（平素は無人だ）左に手水舎、日本の手拭が三四枚、水は濁つてゐる。社務所の傍に池があつて、日本の鯉が泳いでゐる。／熱帯の太陽は朗らかに照る。周囲は静寂としてゐる。――心静かに礼拝が出来た。

此の神社の神主さんは、黒住教の教師をかねてゐる。一日と十五日には新嘉坡の市街から出て来て奉仕する、参拝者は、主として在留邦人の第三階級とも云ふべき人々であるが、国家的重大事には、領事以下参拝する。そ

して神前でなされる協議は極めて円満に纏る。平素はゴム園内の支那人が清掃の任に当つてゐる。氏子戸数訳三百戸。凡べては、内地の村邑の神社を想像すれば好い。[27]

神社は、シンガポールの市内から離れた場所にあり、神主が「黒住教の教師をかねてゐる」とある。この人物こそが、スランゴル州から移動してきた永田弥八郎である。永田が黒住教の教師資格を持っていた可能性は低いが、[28]教師に準じた宗教活動をしていたことを裏付けるものである。

続けて小笠原は、新嘉坡大神宮の起源について、「新嘉坡大神宮由来記」なる一文を紹介する。文書の由縁は記していないが、起草者の平原文三郎は、シンガポール南方にあるオランダ領東インド〔現・インドネシア〕のリアウ諸島バタム島近くの小島（平原は桃江島と呼んだ）で、果実とゴム栽培を手掛けていた海軍中佐（予備役）の人物であった。

新嘉坡大神宮由来記

新嘉坡トムソン、ロード大平氏護謨園丘上ニ奉祀スル天照皇大神宮ハ大正十一年紀元節ニ於イテ総領事浮田郷次氏ヲ始メトシ、大西駐在官山崎〔主計〕日本人会長古藤〔秀三〕南洋日々新聞社長等十数名参集シ、神饌ヲ捧ゲ平原〔文三郎〕海軍中佐ハ祭文ヲ奉読シテ後一同参拝シテ以テ式ヲ了セリ。昭和二年ニハ拝殿ヲ新築セリ。且ツ大平〔源四〕氏敷地ヲ寄進シ之ヲ奉齊会ニ引次ギセリ。爾来船舶寄港者ノ参詣アリ。又居留民生児ノ御宮詣アリ。一月一日ニハ参拝ノ自動車群集シ居留民崇拝ノ中心タリ。……

昭和三年八月十五日　奉祀団体新嘉坡奉斎会／蘭領リオ州桃江島園主／海軍中佐　平原文三郎[29]

新嘉坡大神宮が位置したトムソン路は、シンガポール市内の中心地から北方のマクリッチ貯水池方面に伸びる道路

である。この道沿いにあるゴム園の丘の上にて、一九二二（大正一一）年二月一一日の紀元節の日に建立されたのである。一九二七（昭和二）年には拝殿を新築した。敷地は新嘉坡奉斎会に寄進されたが、ゴム園を経営した大平源四については後述する。この間の経過は、公文書に詳しい。

一、……交通並ニ氏子トノ関係其ノ他ノ事情（実ハ同地在留邦人ノ力ニテハ維持困難トナリタル為ナル由）ニ依リ新嘉坡「トムソン」路五八号大平園ニ個人奉斎ノ社殿建築計画中ナルヲ幸ヒ大正十一年二月十一日社殿落成ト同時ニ遷座祭ヲ執行シ社名ヲ新嘉坡大神宮ト改称セルガ神霊分身ハ都合ニ依リ昭和七年二月十一日ニ至リテ遷座セル趣ナリ

二、然ル処同大神宮ハ当市郊外ノ交通不便ノ地ニ在リ且亦従来其ノ存在スラ在留邦人間ニ認ムル者少ク少数敬神家ノ寄附ニ依リ月八拾弗程度ノ収入アレ共斯ル少額ニテハ到底神社ノ修理スラ出来サル状態ナルヲ以テ神官ハ昨今多少当地景気ノ恢復セル折柄同社ヲ市内交通ノ便好キ地ニ移転及拡張ノ計画ヲ為シ其ノ資金ヲ民間有志及有力者ヨリ募集シ完成ノ暁ハ当〔在新嘉坡〕総領事館ノ公認ヲセラレ度キ希望ナルガ果シテ同社ニ前記ノ通リ神霊分身ノ遷座アリタルモノナルヤ否ヤ当時ノ記録ハ同社ニ於テ保存セス又当館〔同総領事館〕ノ記録ニテモ明ナラス為ニ主ナル在留民ハ寄附ヲ躊躇シ居ル次第ナリ

三、当地ハ御承知ノ如ク各国人居住シ感情複雑ニシテ殊ニ近来サナキタニ邦人側ニ対スル一般ノ神経等可成過敏ノ折柄神社ノ設置ハ余程考量ヲ要スヘク尤モ一般在留民トシテハ神社ノ設置等モ必要ナルヘク、之カ設置ヲ阻止スル必要モナキモ左リトテ正式ニ神社トシテ認可ヲ与フルノ要モ無之ト被存次第ナルモ只右経費寄附等ノ関係上一般在留民トシハ右カ神宮司庁トノ間ニ如上ノ如キ関係アリタルモノナリヤ、ソレトモ単ニ個人カ祠ヲ建テ、太神宮ト称シタルニ過キサルモノナリヤヲ知悉シタシト希望シ居ルニ付テハ内務省若クハ神宮司庁等ニ御問合セノ上御回示相煩度此段御依頼申進ス〔傍点引用者〕[30]

先に示した「新嘉坡大神宮由来記」に宮司の存在は記されていない。本来は宮司が祭文を奉読すべきところ、平原が担当したことから、一九二八（昭和三）年時点では宮司が不在であったと考えられる。

新嘉坡日本人会が一九三三年に作成した名簿によれば、永田弥八郎は「神官」[31]とあり、大神宮の創建後に宮司になったようだが、就任事由と時期は定かではない。新嘉坡大神宮は神社神道の施設であるが、永田は天照大神を祭神の一つとする教派神道の黒住教の信仰者であったことから、まさに祭神が同じゆえに、祭祀を司る適任者として任命されたのであろう。

現地在住の医師西村竹四郎（一八七一～一九四二）は、日記に一九三四（昭和九）年「十一月二日。大神宮の永田神官久しく癌に苦しんでゐたが死亡した。／大神宮は五哩〔先〕の元大平ゴム園内に奉祀してあるが、神官は社格獲得、遷祀改造等に生前奔走したが、本懐を遂げずに死んだのは名残り惜しいことであらう」[32]と述べる。

西村の記述によれば、公的な社格の授与と社殿の移設を目指していたことが窺えるが、実現せぬまま一九三四年に数え四五歳で永田は没した[33]。まさに神道家として円熟しつつある年齢で帰幽したのである。

（2）社殿が立地したゴム園経営者の大平源四

新嘉坡大神宮は、大平源四が経営する大平護謨園の一角にて、一九二二（大正一一）年に設立されたが、大平の人物像について見てみよう。収入を積み立て事業を拡大すべく、ゴム園経営に乗り出したことは、南洋及日本人社の『南洋之現在』（一九二六年）にある。

> 爪哇に上陸したのが明治四十五年、とう〳〵引つぱられてましてね、ひどい目にあいましたよ――快活な大平氏は新潟県の出身、爪哇から直ぐ新嘉坡に来て当時ビクトリア街内藤洋服店に足を暫し止めてノースブリッヂ路

に〔大平洋服店を〕開店したのが大正三年十一月、大正九年には汗を流した貯えで護謨栽培を初（ママ）めたのが今のトムソン路の大平園、其後同園内に大神宮を申請したのが大正十一年二月十一日、同十二年に〔同店を〕ブラスバサー路に移転して現在に及んで居るが、兎に角敵も造れば味方もある、それが普通よりハツキリとして居るだけ目立つ、大神宮を一般のものにしたいと真実に云ひ出して拝殿建立から今日迄二年を費して漸く今度奉賛会が確実に出来て引き渡す事になつたのである、氏には履歴も多いし事件も多い、今は又鷲尾ドクトル等と〔ジョホール州〕クルアン近くに護謨園を新しく開いて居る。園を二方にかけ洋服店は新しく技師を呼んで大拡張、短躰の男[34]

この一文によると、大平は、一九二〇（大正九）年にゴム園経営を始める。「大神宮を一般のものにしたい」ことから、行政当局に大神宮の建設を願い出て一九二二年二月一一日に落慶するのである。

シンガポールの日本人社会では、新潟県人が大いに活躍した。大平は、新潟県南魚沼郡伊米ヶ崎村（現・魚沼市）干溝の出身である[35]。海外移住を集団で進めた地域ではないので、立身出世から単身で南洋に向かったのである。前掲の引用文にある大平による別のゴム園での共同事業者である「鷲尾ドクトル」とは、現地で同仁病院を経営した新潟生まれの医師の鷲尾信一である[36]。さらに「在南邦人中、物質的には唯一の成功者[37]」と評された同地で呉服商「越後屋」を営んだ高橋忠平は、新潟の柏崎出身である。

（3）永福虎へのゴム園経営権の譲渡

大平源四がシンガポール市内に経営したゴム園は、その後に開戦前までの何れかの時期に、「神社所在地の護謨園経営者永福虎氏（日本人大昌公司主事[38]）」に代わったのである。

永福虎（ながふくとら）（一八九〇～一九七〇）は、南洋で漁業事業を広く行った人物である。前掲の『南洋之現在』には、「鹿児

島県の出身、水産学校出の氏は研究生として農商務省より派遣されたのが大正三年、実に氏が海外に活躍の第一歩であつた。大正七年、大成公司を起こし流し網を使用し同じく九年に株式会社大成公司に売却し、氏は同社要職の位置にあつたが大正十一年遂に会社を辞して単独に大昌公司を開き専らムロ漁に従事し、今は彼南（ペナン）、更に爪哇（ジャワ）迄活躍して居る。尚氏は十三年度に新嘉坡日本人会副会長であり、夫人〔しげ子〕は慥か大正三年小学校に教職を一時取つて居た」[39]とある。永福は、日本人社会で存在感を示した。南洋の出稼ぎ漁民は、鹿児島県の出身者が多かったという[40]。

新嘉坡大神宮が名所になっていたことは、新嘉坡日本人倶楽部の『赤道を行く――新嘉坡案内』（一九三九年）に見える。「掛巻くも畏き、伊勢の／皇太神宮遥拝所として、新嘉坡太神宮といふのが奉斎せられてゐて国民精神の陶冶、祖宗尊崇の大義を訓へ、神乍らの大道この南溟三千里の外にまで炳として昭らかなことは特にわれ等の感激して息まぬところである[41]」とある。

大神宮は、日本本土に鎮座する伊勢神宮の内宮（皇大神宮）の遥拝所になり、現地在住者から崇敬を集め、欧州航路の寄港地であったことから旅行者の参拝があったのである。

（4）千々和重彦への継職

新嘉坡大神宮の初代宮司である永田弥八郎が、一九三四（昭和九）年一一月に、没したことは先述のとおりである。その後、南洋及日本人社の『南洋の五十年――シンガポールを中心に同胞活躍』（一九三八年）の掲載名簿には、「永田重彦……大神宮神官」とある。一九〇七（明治四〇）年に福岡県遠賀郡中間町（現・中間市）で生まれ、シンガポールへ最初に到着した日が一九三四（昭和九）年一二月一三日とある[42]。この人物こそが福岡の「筥崎宮から遥々来任[43]」して、新嘉坡大神宮の二代宮司に着任した千々和重彦である。

矢野の『「南進」の系譜』は、着任と改姓の経緯を紹介する。千々和は社家に生まれたが、長男ではないため神社を継承できず、各地で奉職しても宮司の就任には至らなかった。新嘉坡大神宮の後継者としての話が舞い込み、現地

へ渡航した。現地の世話人から、戸籍名は変えなくてもいいが初代の姓を名乗ることを求められた。永田弥八郎の死去直後に到着して、同地では「永田重彦」として活動したが籍が勝手に変えられ、後年に訴えを起こしたという。[44]

五、照南神社への改称

（1）改称前後の様子

新嘉坡大神宮は、照南神社と改めた。『皇国時報』によると、千々和重彦の兄である千々和太郎からの来信をもとに、一九四〇（昭和一五）年一一月の「紀元二千六百年大祭を期して昭南神社と改称[45]」したと紹介する。ただし、前年の一九三九年に改称したとの証言もある。三井物産に勤めた吉岡利起による『マレーの実相』（一九四二年）は、改称後に訪問した当時の様子を記している。

私は昭南市へ転勤して先輩に「大神宮様が御祀りしてある」と聞いて、居が定まると取敢へず参拝した。「大神宮様」と在留邦人達は一般に奉称してゐたが昭和十四〔一九三九〕年以来照南神社と改称し奉ることとなつたのである。／二間四方ばかりの小祠で、鳥居、御手洗所など一通り形は備わつてゐるが、建立以来相当年数も経ち、風雨によつて大分社殿も荒廃し、私は少々勿体ないやうな感じが深かつたのである。……

そのうちに市街在住邦人が参拝に遠隔で不便多きこと、日支事変進展に伴れ支那人排日行動から来る影響の顧慮、遠い郊外に孤住する神官永田〔千々石重彦〕氏が排日支那人に阻げられて乗合自動車にさへ乗せて貰へず電話もない不便さ等、それに社殿修築問題等も起り、日本人会有力者多数の間にも色々考慮尽力せられた結果、改めて「照南神社」と奉称し神社維持奉仕並に会計事務等総て日本人会内の一機関に於て整備担当し新に照南神社氏子会が結成されて、神社を市街に近い日本人倶楽部運動場附近に御鎮座のことも実現されることになつた。[46]

つまり改称時期は、一九三九年又は一九四〇年の二説があることになる。それよりも吉岡の記述で重要な点がある。従来の照南神社が、市内郊外のため参拝に不便で、日中戦争以降に起きた中国系住民による反日運動の影響があり、参拝に不都合が生じたことから、新嘉坡日本人倶楽部の運動場附近に「御鎮座」とある。これは、照南神社の飛地境内地のことである。

現在のシンガポール日本人会が発行した書籍には、市内セレギー路の日本人倶楽部の横に建立されたこの社の写真を掲載する。扁額の写真が不鮮明であるが「照南神社稹宮」と推定する（**図3参照**）[47]。あまり聞きなれない社名ではある。

推察するに、神社が所在するゴム園を経営していた大平源四は、新潟県出身であるが、同地には、古くは戦国武将の上杉謙信が崇敬した「槇神明宮」（新潟市西蒲区巻甲、通称・巻神社）があり、ここに由来した可能性がある。つまり飛地境内地は「照南神社槇宮」と呼称がされたと思われるが、詳細は不明である。

また吉岡の記述によれば、新嘉坡日本人会内の一部門として照南神社氏子会が組織されたという。矢野の『「南進」の系譜』によれば、二代宮司の千々和重彦の主導で日本化を進めたとされる。矢野は、「千々和の苦労は大変なものだったようである。

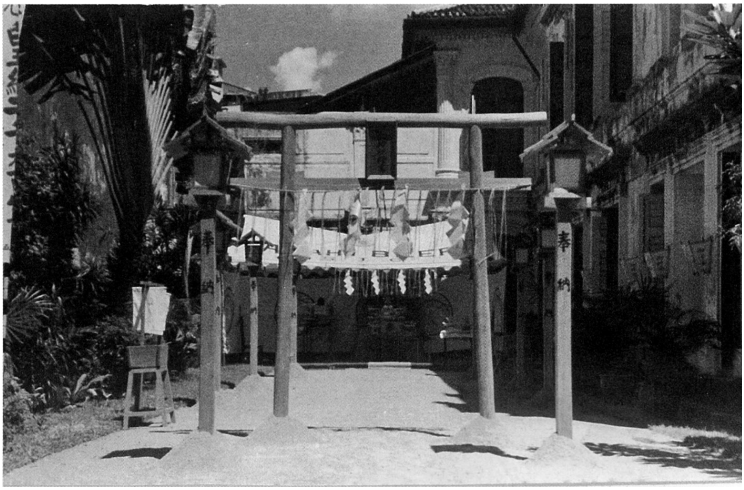

図3　シンガポールの市内中心部に建立された飛地境内地「照南神社稹宮」又は「照南神社槇宮」

まず、「氏子会」あるいは「奉賛会」という言葉づかいから定着させねばならなかった。しかし、どうにか奉賛会や氏子会を組織することに成功した[48]」と記して、永田の主導で運営されていたような記述である。同地に駐在した報道記者の篠崎護（一九〇八～一九九一）は、「名目上の神官として、永田〔千々和〕重彦という人が、神事を司っていた[49]」と証言する。名目上とは、言うまでもなく消極的な意味で使われる表現である。

実際のところ、吉岡の記述のとおり「日本人会有力者多数の間にも色々考慮尽力せられた結果」で組織化されたものであり、永田は組織に任用された一神職であったと考えるのが妥当である。

（2）開戦直後の照南神社と現地住民の神体保護

日本軍によるアメリカの真珠湾奇襲攻撃とマレー半島の上陸作戦により、一九四一（昭和一六）年一二月八日に開戦となる。マレーを進攻した日本軍は、一九四二年二月一五日にイギリスによる東洋支配の拠点であるシンガポールを占領する。『台湾日日新報』は、占領前後の照南神社の様子を報じる。

昭南港はマレー人、印度人、支那人など全市民の皇軍に対する協力的態度日増しに加はり新生の足取りを力強く進めてゐるがここに四名の印度人が血生臭い戦争の禍中に畏くも　両陛下の御尊影と在留邦人の守護神の御神体とを身をもつて御守護申上げた事実がこのほど判明その敬虔と誠実とがわが現地軍当局に認められて遂に昭南警備の○○部隊長より賞状が授与せられたといふ佳話がある、昭和十四年シンガポール日本人会は全在留邦人の守り神として市外北方五哩辺の護謨林の中に神社を建立して〔中略〕拝殿正面には畏くも／　両陛下の御尊影を御掲揚申上げて全在留邦人は毎月一日十五日には必ずここに参拝　聖寿の万歳と国家の隆盛を御祈念申上げてゐた昨〔一九四一〕年十二月八日先づ男子在留邦人は全部英官憲の手で逮捕され、三日後には婦人もまた留置されるに至つたが予てこのことあるを予期してゐた神社所在地の護謨園経営者永福虎氏（日本人大昌公司主事）は留

置されるに際して、後に残るしげ子夫人に二本の国旗を与へて／「一本は神社に立て他の一本は自分の家屋に立てて日本軍の来るのを待て」と命じて行つた、十一日にはしげ子夫人も英兵に連れ去られねばならなくなつたが同夫人はこの時四名の印度人使用人ラム・ダハリ（二四）サダ・ハル（二四）ダル・バリ（二八）ラヂ・トラム（二〇）に夫より預けられた二本の日章旗に米一俵に金卅円を添へて渡し「特に御神体と御尊影とは身をもつて守つて下さい」とくれぐれもいひ含めて去つたのであつた、託された四名は先づ尊影を彼等の小屋にお移し椰子の葉を編んだ屋根の下に安置し、英兵の一群が神社に来て泥靴で拝殿を踏荒し目星い装飾を掠奪して去つたが幸ひに御神体は無事に残り、御尊影は右のやうな印度人達の処置で難を免れることが出来た、しかし日本軍はシンガポールに肉薄し戦争は更に激しくなつて弾丸は彼等の身辺に雨飛し危険極まりなかつたが、主人の遺して行つた言葉に飽くまでも忠実な彼等四名は最後まで神社の傍らに留まり身をもつて御神体と御尊影を守り続けたのである、二月十五日遂に全英軍は日本軍に降伏した〔ゝ〕彼等は十六日御尊影を再び祭壇正面にお返し申上げて四名が交代でお守り続け遂に今日に至つた、たま〳〵二十八日警備隊の〇〇部隊長が巡視の際彼等を発見右の事実が判明したので、同警備隊では直ちに御神体と御尊影を同隊本部屋上にお移し申すと共に同部隊長は右四名の印度人に対し表彰状を与へたのである。[30]

この記事では、インド系住民が祭神の神体と天皇の真影を守ったとある。ただし前述の篠崎護は、異なる証言をする。

大東亜戦争と共に……〔照南〕神社は戦火にさらされた。そして、昭和一七年二月シンガポール陥落の直後、筆者が、華僑協会設立の許可を得るため、フォート・カニングの日本軍警備司令部を訪れたときのこと、一人のマレー人が、美髭の参謀を前に直立して、感謝状と金一封を受けているのを見た。／彼は大神宮の御幣とお札を

大切に保管して軍司令部に出頭し、林忠彦少佐参謀から大いに感謝されていたところであった。／林参謀は辻政信参謀の最も信頼していた作戦参謀で、日本軍に抵抗した中国系市民の粛清のためわざわざ第二五軍司令部から、臨時に警備司令部に派遣されていた。[51]

つまり照南神社の神体は、『台湾日日新報』ではインド系、篠崎はマレー系の住民が保護したとする。いずれせよ、反日感情が根強い華僑以外の現地住民が協力したのは確かである。気になるのは先の記述に、宮司である千々和重彦の名前がないことである。宮司が神体を置いたまま戦火から避難したとは考え難いので、開戦前に離任したのだろうか。

一九四二（昭和一七）年の日本軍のシンガポール占領後（**図4参照**）[52]、同地を「昭南島」と改名して、軍政組織である昭南軍政監部の下に昭南特別市が設置された。照南神社は昭南神社と名前を変えた。その後、社殿老朽化のため市郊外への本格移転を前に、神体は市庁舎屋上に仮奉斎された。一九四三年の正月の様子が報道され、「この朝昭南特別市では早朝九時から市庁舎前で四方拝式を挙行日本人のほかに現地人官吏も多数列席した、式後市庁舎屋上に奉安した昭南神社および旧昭南神社御神体の前に額

図4　照南神社の社殿。参拝する日本兵。1942（昭和17）年2月20日撮影

づき戦勝祈願を行つた」[53]のである。

六、「照南」及び「昭南」の呼称起源

新嘉坡大神宮から照南神社に改称されたのは、前述のとおり、一九三九（昭和一四）年又は一九四〇年である。矢野の『「南進」の系譜』では、「昭和十五年、千々和は「シンガポール大神宮」というそれまでの名称を「照南神社」と改称した」[54]と断じる。矢野は、「照南」（しょうなん）の創始者を千々和重彦とする説の補強材料として、朝日新聞の従軍記者であった酒井寅吉（一九〇九～一九六九）の『マレー戦記』（一九四二年）を引用する。酒井は、文中で「昭南神社」と記すが開戦直後なので「照南神社」が正しい。その酒井の記述である。

> 我々〔日本軍〕は七十余日マレー戦線を進撃しつつあるとき目ざすあの島の命名について頭を絞つてゐた。曰く「大星港」曰く「昭和島」……等々、長い従軍期間中およそ二千に近い名前があげられた。しかしこの二千に近い候補の中には「昭南」といふのはなかつた。それが陥落僅か二日目、命名は誰の考案によるものか電撃的に行はれた。それが偶然にも「昭南神社」（ママ）の名に符号してゐたのである。[55]

矢野は、前述のとおり「「しょうなん」という表現の創始者が千々和」[56]とする。しかし、それ以前に近似する表現があった。

前掲の「新嘉坡大神宮由来記」の末尾に、「本月〔一九二八年八月〕ハ欧州大戦当時ノ司令官タリシ財部（たからべ）〔彪（たけし）〕海軍大将ノ額面ヲ平原〔文三郎〕中佐持参シ之ヲ奉納セリ」[57]とある。この扁額は、前掲の吉岡利起によれば、「社殿正面に財部海軍大将が嘗て練習艦隊司令官として寄港の時、揮毫奉献された「皇威照南洋」の額」[58]という。

別の海軍将校も扁額を奉納していた。前掲の『台湾日日新報』の記事では、「昭和十四年シンガポール日本人会は

全在留邦人の守り神として……護謨林の中に神社を建立してこれに岡田啓介大将より寄せられた「神徳昭南溟」の句を出典として昭南神社の名を奉り[59]」とある。開戦前の名称は「照南神社」なので社名は間違いであるため、もしかすれば「神徳照南溟」と寄せた可能性もある。つまり、照南神社に奉納された扁額が、少なくとも二つがあったことになる。

① 「皇威照南洋」――一九二八（昭和三）年奉納。海軍大将財部彪（一八六七～一九四九）揮毫。

② 「神徳昭南溟」又は「神徳照南溟」――一九三九（昭和一四）年頃奉納。海軍大将岡田啓介（一八六八～一九五二）揮毫。

これらの経緯から考察するに、千々和の独断で、改称をした可能性は極めて低い。財部が寄せた扁額に由来する「照南」が、社名変更のヒントになったのではないか。更に言えば、財部は、日向国一之宮である都農神社（宮崎県児湯郡都農町）の宮司を務めた、都城藩士の財部実秋（一八二七～一九一三）の二男であることから、神社に有縁がある軍人として揮毫の適任者であったのである。改名の意思決定は、新嘉坡日本人会の幹部による合議があっただろう。

おわりに

本論は、マレー半島にて黒住教信者の永田弥八郎が建立した馬来半島大神宮に始まり、戦前のシンガポールの日本人社会で崇敬されて永田が宮司を務めた新嘉坡大神宮、及び改名後の照南神社の沿革について、従来の通説を更新すべく明らかにしたものである。

特に、矢野暢の『「南進」の系譜』での誤記を指摘した。本論の冒頭で述べた問題点の「初代宮司はキリスト教ではなく黒住教の信者である」及び「「しょうなん」という表現の創始は千々和重彦ではない」の二点は、文中で論証

したとおり矢野の誤認が明確となった。後年に矢野は、勤務先の大学で倫理上の問題を起こし、退職に至った。擁護はできないが、近代日本の南方関与に関する数々の研究成果は避けて通れない。後学者は批判的に継承して乗り越えていくことが求められる。

解明すべき課題が残された。第一に新嘉坡大神宮から照南神社への改名時期は、本論でも引用した『台湾日日新報』は一九三九（昭和一四）年で、『皇国時報』は一九四〇年とあり定かではない。第二に初代宮司の永田弥八郎が、なぜにスランゴル州のゴム園経営を停止して新嘉坡大神宮の初代宮司に就任したかの経緯について、第三には同神社が所在したゴム園の経営者が大平源四から永福虎に変わった時期については、本論で明らかにできなかった。今後も、三点の調査を継続する。

一九世紀から二〇世紀にかけて南洋に渡っていた日本人は、本論で述べた以外に多くの人々が存在していた。母国から遠く離れた地にて、事業への成功と感謝の祈願、それに日本との繋がりを心情と形態で表したものが、敬神思想に基づく神社であったことは間違いないであろう。

最後に本論をまとめると、黒住教信者の永田弥八郎が、馬来半島大神宮を自ら創建した後に、大平源四が寄進した新嘉坡大神宮の宮司として移る。没後は千々和（永田）重彦が継承して、照南神社に改められる。日本軍のシンガポール占領後は移転拡張して昭南神社と改称するが、敗戦で廃絶するのである。

（文化庁宗務課専門職）

（1）拙稿「昭南神社――創建から終焉まで」（柴田幹夫・郭俊海編『シンガポール都市論』アジア遊学第一二三号、勉誠出版、二〇〇九年）、拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』（法藏館、二〇一五年）第Ⅲ部第一章「真如親王奉讃会とシンガポール」。

（2）神社本庁編『神社本庁十年史』（神社本庁、一九五六年）に「シンガポールには新嘉坡大神宮（後の昭南神社）」（二九頁）

とある。

(3) 稲宮康人・中島三千男『「神国」の残影――海外神社跡地写真記録』(非文字資料研究叢書二、国書刊行会、二〇一九年)。

(4) 矢野暢『「南進」の系譜』(中公新書四一二、中央公論社、一九七五年)、一三五頁。再刊、同『「南進」の系譜　日本の南洋史観』(千倉書房、二〇〇九年)。

(5) 前掲、矢野暢『「南進」の系譜』、v頁。

(6) 前掲、一三七頁。

(7) 前掲、一四二～一四三頁。

(8) 前掲、一四〇頁。

(9) 前掲、一四一頁。

(10) 南洋及日本人社編纂部編『馬来に於ける邦人活動の現況』(南洋及日本人社、一九一七年)、「記事の部」二五頁。なお同書の「写真の部」には、南洋護謨園内の大神宮(五二頁)、藤田組南興植林地大神宮(五八頁)が掲載される。

(11) 「全国教会所一覧表(大正三年十一月調)」(『日新』第七巻第一号、黒住教日新社、一九一四年一二月、八〇頁)によれば、長崎県内の教会所は次のとおりである。①武生水教会所(壱岐郡武生水村、日高兵三郎)、②佐世保教会所(佐世保市八幡町、佐藤泰実)、③有川教会所(南松浦郡有川村、井本縣)、④志佐教会所(北松浦郡志佐村庄野免、武内寿之)、⑤平戸教会所(北松浦郡平戸村大字浦ノ町、中山政憲)、⑥島原教会所(南高来郡島原村、空欄)、⑦波佐見教会所(東彼杵郡波佐見村、渋江三善)、⑧長崎教会所(長崎市本大工町、山口昇)、⑨立神教会所(長崎市立神郷、田川和平)。そのうち現在まで宗教法人格が存続するのは、③有川教会所、⑤平戸教会所、⑧長崎中教会所の三か所である。本論文で引用した黒住教発行の雑誌は、國學院大學日本文化研究所が作成したマイクロフィルムを参照した。

(12) 無署名「海外に於ける黒住教」(『経世雑誌』第四巻第七号、経世雑誌社、一九一二年六月)、四～五頁。

(13) 前掲、南洋及日本人社編纂部編『馬来に於ける邦人活動の現況』、「記事の部」二五頁。当該箇所には、永田護謨園の経営規模が紹介され、「租借面積　五五英反〔エーカー〕／伐木面積　一五／植付面積　一五／切付面積　無し／植付間隔　二十呎方形／苦力〔クーリー〕数　不明／所在地　セランゴール州キリリン村／交通関係　キリリン駅迄一哩半」とあり、永田

はペラ州タンジュン・マリムに「売薬店を有せり」という。

(14) 伊藤友治郎編『南洋年鑑――附興信録』（南洋調査会出版部、一九一六年）、三二六頁。

(15) 伊藤友治郎『南洋群島写真画帖――附・南洋事情』（南洋調査会、一九一四年）、五〇頁。

(16) 口絵「馬来半島に建設せむとする黒住教教会所」（『経世雑誌』第四巻第七号、一九一二年六月）、i頁。

(17) 前掲、「海外に於ける黒住教」、五頁。

(18) 前掲、五頁。

(19) 「教勢一覧図」（『経世雑誌』第五巻第二号、一九一三年一月）、巻頭折込地図。文中にある樺太豊原の黒住教教会は、後に県社の豊原神社へ発展した。

(20) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012567800、本邦神社関係雑件　第八巻　2．英国及属領（1）新嘉波大神宮（外務省外交史料館）、第二画像目。

(21) 無署名「時報　馬来半島に於ける本教」（『日新』第八巻第九号、一九一六年八月）、六八頁。

(22) 前掲、六八頁。

(23) 無署名「時報　馬来半島に太神宮奉建」（『日新』第九巻第六号、一九一七年五月）、六〇頁。

(24) 前掲、本邦神社関係雑件　第八巻　2．英国及属領（1）新嘉波大神宮、第二画像目。

(25) 前掲、第五画像目。

(26) 西村竹四郎『在南三十五年』（安久社、一九三六年）、四九四頁。再刊は、『シンガポール三十五年』（東水社、一九四一年）。

(27) 小笠原省三『海外の神社――並に「ブラジル在住同胞の教育と宗教」』（神道評論社、一九三三年）、二五六～二五八頁。同書では、シンガポールの豊川稲荷大明神社（一九二四年創立）も紹介する（二五九頁）。

(28) 黒住教学院講頭の長恒彰浩氏から、過去の同教所属の教師名簿に永田弥八郎は該当がないとの教示をいただいた（二〇二〇年六月四日回答）。

(29) 前掲、小笠原省三『海外の神社』、二五八頁。

(30) 前掲、本邦神社関係雑件　第八巻　2．英国及属領（1）新嘉波大神宮、第二～三画像目。

(31)「新嘉坡日本人会々員名簿（昭和八年五月十日締切）」（新嘉坡日本人会編『新嘉坡日本人会々報』第一八号、新嘉坡日本人会、一九三三年五月）、七五頁。
(32) 前掲、西村竹四郎『在南三十五年』、六四七頁。
(33) 樋口直樹・勝真由美・川田悠介編『シンガポール日本人墓地――写真と記録』（シンガポール日本人会、一九八三年）には、永田弥八郎の墓石は掲載されない。
(34) 南洋及日本人社編纂部編『南洋之現在』（南洋及日本人社、一九二六年）、一六四頁。
(35) 伊藤友次郎編『第二回　南洋年鑑興信録――附南洋要覧』（日南公司南洋調査部、一九一八年）、「南洋要覧」二九〇頁。原文は氏名「大平源司」、出身地「東魚沼郡」とあるが誤記である。
(36) 前掲、南洋及日本人社編纂部編『南洋之現在』、一六一～一六二頁。
(37) 前掲、西村竹四郎『在南三十五年』、六〇八頁。
(38) 無署名「昭南神社　御神体、御尊影を印度青年護り抜く／〇〇部隊長から賞状を授与」（『台湾日日新報』第一五〇八二号、台湾日日新報社、一九四二年三月三日）、二頁。同盟通信社の配信記事。
(39) 前掲、南洋及日本人社編纂部編『南洋之現在』、一五七頁。
(40) 永福虎の南洋漁業事業は、片岡千賀之『南洋の日本人漁業』（同文舘出版、一九九一年）に詳しい。
(41) 新嘉坡日本人倶楽部編『赤道を行く――新嘉坡案内』（〔新嘉坡〕日本人倶楽部、一九三九年）、一一二頁。
(42) 南洋及日本人社編『南洋の五十年――シンガポールを中心に同胞活躍』（章華社、一九三八年）、七〇一頁。
(43) 吉岡利起『マレーの実相』（朝日新聞社、一九四二年）、一四六頁。
(44) 前掲、矢野暢『「南進」の系譜』、一三七～一三八頁。
(45) 無署名「旬間情報」（『皇国時報』第八〇八号、皇国時報発行所、一九四二年三月一日）、五頁。同資料は國學院大學神道文化学部准教授の藤本頼生氏の提供による。
(46) 前掲、吉岡利起『マレーの実相』、一四六、一四八頁。
(47) シンガポール日本人会編『戦前シンガポールの日本人社会――写真と記録　改訂版』（シンガポール日本人会、二〇〇四年）、

一六七頁。写真の説明文は「一九四〇（昭和一五）年四月二〇日　照南神社大祭　鳥居の額の文字は「照南神社稹宮」と読める。場所はセルギー路の日本人倶楽部横。日本人会も同じ建物にあった」。同書からの転載は、発行者より許可を得た。

(48) 前掲、矢野暢『「南進」の系譜』、一三九頁。

(49) 篠崎護「シンガポール占領と「昭南」時代――私の戦中史」（シンガポール日本人会編『南十字星　シンガポール日本人社会の歩み――創刊一〇周年記念復刻版』シンガポール日本人会、一九七八年）、六二頁。

(50) 前掲、無署名「昭南神社　御神体、御尊影を印度青年護り抜く」、二頁。

(51) 前掲、篠崎護「シンガポール占領と「昭南」時代」、六二頁。

(52) 前掲、シンガポール日本人会編『戦前シンガポールの日本人社会』、一六六頁。新聞記事の写真を転載するが出典は無記。

(53) 無署名「必勝へ明けたり／大東亜共栄圏の新春」（『朝日新聞』第二〇三九五号、一九四三年一月二日）、朝刊四頁。

(54) 前掲、矢野暢『「南進」の系譜』、一四〇頁。

(55) 酒井寅吉『マレー戦記』（朝日新聞社、一九四二年）、二五三～二五四頁。

(56) 前掲、矢野暢『「南進」の系譜』、一四二頁。

(57) 前掲、小笠原省三『海外の神社』、二五八頁。

(58) 前掲、吉岡利起『マレーの実相』、一四六～一四七頁。文中の財部彪は、練習艦隊司令官の軍歴がなく第三艦隊司令官を務めたので誤記であろう。

(59) 前掲、無署名「昭南神社　御神体、御尊影を印度青年護り抜く」、二頁。

〈キーワード〉
馬来半島大神宮、新嘉坡大神宮、照南神社、昭南神社、シンガポール日本人会